



雑草のことども

公益財団法人日本植物調節剤研究協会 評議員
エフエムシー・ケミカルズ 株式会社 代表取締役社長
平井 康弘

大学を出て最初に入った会社は外資だった。不謹慎だがアグリビジネスというより、ずっとやっていた空手の練習を続けられるのが一番の理由だった。実はメーカーということもよく知らなかったのだから、その時の上司や今の就活生が聞いたら驚くだろう。いや怒るだろう。そのくらい世の中は寛容だった。会社に入って最初に言われたのが雑草の種類を覚えることだった。これがスズメノテッポウで、これがスズメノカタビラ。これはスギナでこれはヒメオドリコソウ。春草、夏草、一年生に多年生。ハルジオンにヒメジョオン。10m先から草の色や高さで草種が判別できるようになってくれと先輩から言われた。無理だろうと思った。

田んぼの畔に出て、草を眺めていると、時間はゆっくり過ぎていった。これから世の中コンピューターや携帯で忙しくなる時代でも、大地だけは変わらない時間が流れていた。春は天気がよく、暖かかった。

雑草を覚えるのは簡単に進まなかった。先輩たちが全国のあちこちで問題雑草を拾ってきては、仕事のネタにしていた。地方の呼び名もあり、できればそれで呼んだほうがお客さんもピンとくるから、その呼び名も覚えろと言われた。その時、会社には神様と崇められていた雑草のエキスパートのお爺さんがいた。何を聞いても経験談と共に話してくれる。生態はもちろん、完璧な枯らし方までよく知っている。あとでその人が植調出身と聞いて、植調が眩しく見えるようになった。

やがて、雑草だけでなく害虫、病気にも追いかけてまわされた。海外で世界の市場を担当した時、私には病気の区別などつかず、スイスの畑でやはり葉の裏の病変を見て、それが何かすぐ分かるようになってほしいとスイス人から言われた。言うことはどこでも同じらしい。

海外の仕事も役に立った。イタリア人と喧嘩もしたが、ルッコラがもともと果樹園の雑草で、貧しいから食べるようになったのが起源だと教わったのもイタリア人だった。イタリア人の言うことだから本当かどうかは分からない。

ジャガイモの病気よりワイン（ぶどう）の病気の方が気になった。あまり行かないジャガイモ王国オランダの社長とも

よく口論になった。ポテトヘッドとは愚か者、馬鹿者という意味らしいが、危うくその単語を何度も発したい衝動にかられ、そのたびによくこらえた。あの時の感情の揺らぎが学習だったと今になってみればわかる。

種苗の仕事をしていた時は栽培、青果流通にも明るくなければ仕事にならなかった。餅は餅屋、本当に奥が深く、それぞれの業界と人がつながり、農産物が食卓に上がっていることを思い知った。

この業界での仕事は自分が何も知らないと痛感することの繰り返しだった。人から教わることへの感謝と謙虚さがなくては務まらない。全国、各方面の専門家の経験や知恵の上に自分の仕事が成り立っていた。今も人に聞いてばかりである。組織の力は専門性の掛け合わせがものをいうし、国の農業の力や将来もやはり同様のだろう。弊社のテクノロジーをベストな形で世に出すにあたり、植調の先生方の知見、ご支援には本当に感謝している。

日本の食卓は戦後、生産者の大変な苦勞と経済力のお陰でしばらくは平和で、豊かな暮らしが守られてきた。これからはそうはいかない。食糧安保、地球環境、農業そのものももたないと言われている。2050年の食料自給率が19%になるという怖い話もある。豊かな時代から、私たちの子や孫が飢えないか、という切実な問題が見え隠れしている。

今が幻と言われぬように、先人の知恵、業界の叡智を結集して、日本の農業を元気にしなければいけない。ユネスコに登録された「和食」のお陰で海外では猛スピードで日本食レストランが増えている。世界の「和食」という苗木がやがて大きな木となり、世界に冠たる料理になれば、日本の農産物ももっと旺盛に輸出され、農業にも元気がでるだろう。元気を出すには生産場面で山積する課題の解決、技術革新が今以上に欠かせない。農家の「賃上げ」は一丁目一番地だ。

弊社だけでは^{とうろう}の^{おの}斧だが、できないと思ったら何もできない。社会全体で日本の食や農の未来は変えられるはずだし、その為に少しでも頑張ることがせめてもの恩返しだと思っている。